

ニューフェース、ポスターセッションの登場

郡 司 好 喜*

社会の進歩とともに情報が激増し、個人相互はもちろん集団相互の距離はきわめて短くなつてきます。しかし、情報の伝達がスムーズにしかも正確に行われないと逆に混乱と歪みが生ずることも事実であります。

産業及び科学技術の急速な発展に伴つておびただしい情報が発生しておりますが、それらの情報を正確に収集、伝達する媒体としての学協会の仕事はいちじるしく膨張するとともにその悩みも深くなつてきております。講演数が年間千数百件にも達するまでに増加してきた鉄鋼協会も例外ではありません。年間数百件の講演が行われていた時代に確立された現在の方式ですと、開催するための会場の確保が困難になつてきたばかりでなく、聴きたい講演が同じ時間に並列で行われるなど、大きな欠陥が生じてきました。もちろん、講演時間の短縮、講演大会々期の延長など、物理的な改善策がないわけではありませんが、それによつて生ずる不利益も否めません。

こうした背景の中に登場したニューフェースがポスター

セッションであります。そのルーツをたどりますと、研究室や職場でのディスカッションスタイルが原形であり、それをそのまま講演会場に運んできたと考えればよいわけです。従つて内容の理解や討論が不満足であるはずがなく、むしろ別な面に問題が生じてきます。数多くのポスターセッションを行えば、講演数過多の問題は解決され、発表も討論も十分行われ、聴講者は選択的に聴講と討論を行うことができます。その反面、発表者は他の講演を聴けないとか、聴講者には限られた時間内に聴講できる講演数に限度が生ずるという欠陥のあることも事実であります。

小規模ながら3年にわたりポスターセッションを実施し、会員の皆様の忌憚のない御意見をうかがつてきましたところ、きわめて強く支持されていることも理解できました。今後は、講演数の動向を見守りながら、ポスターセッションのもつている欠陥を是正しつつその発展をはかるべきだろうと考えています。

~~~~~

## 昭和55年春季講演大会ポスターセッションに参加して

楯 昌 久\*\*

ポスターセッションの趣旨は、講演大会あるいはパネルディスカッションと異なり、多数の聴視者への一方的説明ではなく、そのテーマに深い関心を持つ聴視者との1対1の討論を原則としている。従つて発表者の基本的姿勢として、内容的にある程度の独創性を有する魅力あるもので、かつ情報として新鮮味のあるものでなければならない。特に我々現場操業に携わる者としては、単なる理論的・実験的段階の内容に留まらず、実操業から得られた豊富な経験と知識に裏付けされ、かつ理論的解析のなされた内容であることが要求されよう。

この理念を基に発表態度を掘り下げていくと、まず準備は可能な限り広範囲に行い、聴視者を説得させ得るものであり、関係者の批評に十分耐え得るものでなければならない。そして当然限定された時間内に豊富な内容を聴視者に理解させると共に、討議を深く掘り下げられるようにするためには、発表技術も重要な要素であり、かつその説明も要領よく相手を理解させる洗練されたものを必要とする。

一般的に、発表者はその業務を担当する管理者又は実

務担当者であり、特に現場操業者は割合閉鎖的で、外部情報あるいは関係者との接触が少ない。このためこのような機会に多数の関係者と接触できることは、その狭視野を打破する貴重な経験となる。そしてこの際数多くの斬新な考え方・情報および解析方法等を習得することは、発表者のみならず聴視者にとつても、非常に有意義であり、双方のレベルアップに多大な貢献をしていることは否定できない。このためにも今後このポスターセッションの開催に当たつて、そのテーマは、業界全体でニーズの高い時宜を得たもので、独創性があり、質的に高く、かつできるだけすべて公開できることを原則に選定し、必ずしも定期的開催に固執することなく、内容のある有意義なものとして発展させることを切に期待している。

丸 川 雄 浄\*\*\*

今回はじめてポスターセッションの発表をさせていただきました。その時の所感を2、3述べさせていただきます。

まず実施状況は、午前9時頃から1時間程ポスター、図面等会場準備を行い、10時から12時まで2時間たつ

\* 本会講演大会分科会主査 金属材料技術研究所 工博

\*\* 日本鋼管(株)京浜製鉄所

\*\*\* 住友金属工業(株)鹿島製鉄所

ぶり説明と質疑応答を行いました。始めるに先だち、本セッションのねらいである十分ディスカッションをつくるためのくふうとして、2時間を2つに割り1時間ずつの2部講演とし、1時間の内訳として20分講演し、残り40分を質疑にあてることにした。そして質疑の要領として1人の質問に対しすぐ答えるという単発討論の連続にせず、その場の聴視者の中の質問をどんどん出していただき(だいたい10問くらい)、それをこちらで取りまとめ集約し、そして順番も考慮した後に答えて行くということで進めて行こうと決めておきました。このねらいは少なくとも2部講演の初めの講演において十分ねらいどおりに進みよかつたと思います。すなわち、数人の質問者の質問がその場の聴視者全員の問題提起となり、講演者の答弁が全体への返答として討議が全体に広がり、討論が充実したものになったと思います。ただし、後の方の講演は途中で中国のミッションが廻つて来られ、本ポスターセッションとは関係のない複合吹錬の説明をさせられ、そちらの方に時間をとられるというハプニングのために、上記討論形式がとれずに不本意なまま終わってしまいました。

集約質問を3回程繰り返した時点で新しく遅れてお見えの方も増えてまいつたのと1時間経過しましたので、初めから説明をやり直すことを申し上げ、50名くらいの聴視者のうち初めからおられた人達3分の2くらいが入れかわり第2部に移り、終わりまでにはまた50名くらいになつていたと思います。

以上が状況報告の一部ですが、ポスターセッションを受け持つにあたり2時間びつしりとは大変なことだということと、ノウハウに関わるような論議についてどうするか等若干心配がないでもなかつたのですが、終わってみて、研究技術者としてとことん話し、討議できるこういうセッションこそが本来のやり方であつて、現在の15分発表5分質疑は一方通行の簡便方式だと感じました。

最後に今後の運営に関し、気のついたことを2、3記しておきます。

まず会場が狭いということ。そしてできれば演者あるいはポスターの掲示位置が聴視者と同一レベルにあるのは、少し人数が多くなると見にくいので演台等で少し高くしていただけると好都合かと考えます。それからこのポスターセッションは1人の講演は不可能であり2人以上が必要であります。したがって講演者の○も実際にその場で説明にあたるもの2人とか3人に○をつけて通常本講演とは取り扱いも変えた方がよいと思います。また今後ともこういうセッションは拡大し継続されると思いますが、プログラムの編成において同一部門同時講演を廃し、3日間のシリーズにしてほしいと思います。すなわち、今回このセッションでの講演者は同時に行われている他のポスターセッションに行けない。また、小職らのように2部講演が行きわたると2時間で2つの発表し

か聞けないことになるからであります。

以上ポスターセッションに初めて発表する機会を与えられ感じたことを2、3述べさせていただきました。最も大切でかつ困難なことは、発表テーマの選択を初めとするポスターセッションの企画、準備にあると思われる。郡司先生をはじめ、この任にあたられている先生方の御苦勞に感謝しますとともに、それに報いるためにも今後とも我々にできますことは全面協力させていただき、本ポスターセッションのようなすばらしい企画が展開して行つてほしいと思っております。

#### 市之瀬 弘 之\*

圧延関係で、初めての試みであるポスターセッションに出展せよとの依頼を受け、担当者と準備作業に入り、どのような形で行えばより理解が得られるかと、少しディスカッションをしているうちに時間切れとなり、展示物の遠方からの輸送問題もあり、結局は実験データのグラフ展示という最も安易な方法になつてしまつたのは恥ずかしい限りであつた。

当日の全体的な雰囲気であるが、午前中の製鉄関係のポスターセッション会場のにぎわいに比べ、最終日の午後ということもあつてか、来場者が少なく、比較的静かなムード(?)であつた。圧延関係の仕事は、他の分野に比べどちらかと言えば結果が明確に出るため、それに対して異論を唱え、論議する余地が少ないことによるものであろうか。

次に、当日発表された6件は、内容的には圧延理論解析、圧延のプロセス改善などに関するものであつたが、ほとんどが既発表のものの詳細報告の感があり、もう一つ盛り上がり欠ける原因とも思われた。全く新しい内容を望むことは無理であろうが、講演会での発表形式と違って、具体的な実験方法や研究開発に要した期間、費用などの、泥臭い内容を含ませてはどうであろうか。研究者にとつて、開発期間や費用の短縮は極めて重要なことであり、関心事のはずである。また、勇気のいることではあるが、研究の失敗例も入れて、お互いの今後の発展に役立ててはどうであろうか。

発表方法について言えば、現物や模型の展示、VTRの使用など、やはり視覚に訴える方法が優れており、当日もそのような発表場所の前に人が集まつていた。

全体的な印象として、初めての試みとしてはまずまずの成果が得られたように思われる。ポスターセッションは、表現の多様性、討論の自由さなどにより講演会では得られない場であり、有効に活用したいものである。それにしても、観客の声が低ければバナナの叩き売りも迫力はない。出演者と観客の呼応により活況を呈する実験劇場から新しい未来の模索が始まるものと確信して、今後の発展と充実に期待している。

\* 日本鋼管(株)技術研究所福山研究所 Ph. D.

## 宮 川 大 海\*

数年前、アメリカで superalloy に関する国際シンポジウムがあり、これに講演を申し込んだところ、どういふわけか一般講演のあとに行われるポスターセッションにまわされた。送られてきたポスターセッションのやり方に関するイラスト入りの資料を見て、話には聞いていたがなるほどと思つた。このシンポジウムには都合で研究室の若いスタッフに参加してもらうつもりであり、講演はともかく質問が細部にわたって聴きとれるかどうか本人が心配していたから、これはかえつて好都合だと感じた。帰国後の感想では、会話で聴きとれないところは聴きかえし、グラフを紙上に書くなどして、1対1の細かいディスカッションが十分にでき、また数人の知己も得られてとても有意義だつたとのことであつた。運営はラフというか大まかというか、じゆうたんを敷きつめた立派な会場でベニヤ板を2,3枚ずつ渡され、自分の好きな場所に三々五々陣取つて店開きの準備をしていると、まだ準備中なのにいろいろ話しかけてくるお客がいたりして、いかにもアメリカ的な雰囲気だつたそうである。

そんなこともあつて、その後ある大きな学会の講演大会委員会でポスターセッションの話をしたところ、聴講者が1人も立ち寄らなかつた場合、それでも論文発表という業績とみなせるかどうか疑問だとの意見が出て、物事はマイナス面だけをみたのでは何もできないと感じた。

日本鉄鋼協会では講演大会の一層の充実をはかるための新しい試みとして、昭和53年以来、春季大会の一部にポスターセッションを採用してきたが、なかなか好評のようである。私は昭和54年、55年とも発表者の1人としてこれに参加した。昭和55年についていえば、性質関係ではおもに試験法に関するテーマが選ばれ、かなり盛況であつた。ステンレス鋼の粒界腐食試験法、弾塑性破壊靱性試験法など研究者の多いテーマではとくに多くの聴講者を集めた。2時間はあつという間に過ぎ、終わった後はぐつたりというのが実感であつた。ポスターセッションの最大の特徴は、いうまでもなく、個人的に突込んだ討論が思う存分できる点であり、それゆえ一般講演や討論会とはまた違つた成果が期待できる。ただ、そのためには、発表者はもちろん聴講者も事前に十分勉強して積極的な気がまえで臨む必要がある。2時間の実りある討論に耐え得るテーマであれば、テーマ数はそれほど多くなくても、意欲のある聴講者を多数集めることができ、講演大会は一層充実したものになると思う。

## 遅 沢 浩一郎\*\*

今春ポスターセッションで発表する機会を得たが、そこでは自分の乏しい研究内容を2時間ものあいだ人前に

さらけ出し、隅々までみられることになるわけで、発表前はたいへん気が重く、また不安であつた。しかし、発表日が迫ると、諦めの境地か、不安も薄らぎ、多くの人に発表内容を理解してもらうには、いかに展示したらよいかに気を配つた。また、通常の講演発表の場合と異なり、人が必ず話を聞いてくれるとは限らないので、少なくとも人が素通りしないようにしなければならないと考え、発表内容とは直接関係なかつたが、(発表テーマが粒界腐食試験法に関するものであつたので)粒界腐食の事故材を机の上に並べて、まず人を立ち止まらせようとした。この作戦は効果があつたのであろうか。

立ち止まつてくれた人を、その関心の内容によつて分類すると、次の6種類があつたと考えられる。まず、(1)じつと壁の説明などを見て、そのまま立ち去つてしまふ人である。こういう人は、こちらから声を掛けて引き寄せることができるが、手が空いていないときは逃してしまふ。次は(2)特定の点だけを質問または討論される人である。今回は走査電顕組織や腐食機構モデル図についてのものが多かつたが、これらは質問や議論の対象となりやすいからであらう。(3)は、発表内容の要点だけの説明を求める人で、この種類の人は割合多かつた。(4)は、始めから終わりまで一通り説明してくれ、といわれた人である。(5)は、発表内容とは関係のないこと、たとえば困つておられる腐食事故の解決法など、を聞いた人である。(6)は、世間話だけをされた人である。なお、そのほか、勉強のためと称して、発表者の傍に陣取つて、質問や応答の内容を聞いていた人もあつた。レストランにたとえれば、(1)はショウウィンドウのメニューだけを見て帰つた人、(2)と(3)は一品料理を注文した人、(4)はコースを注文した人、(5)は店に入つて道を尋ねたような人である。(6)は、知人がみえて「やあ、しばらく……」というもので、今回は意外とこれが多く、居ながらにして多くの人々に再会することができた。(5)および(6)は、本来の目的とは違うが、発表中の潤滑剤の役を果たしてくれた。こんなことで、思つたよりも「客」の入りが多く、発表者2人では対応しきれないときもあり、2時間はたいへん短く感じられた。

通常の講演会では、時間も短いため、発表者と聴講者間の意志疎通も十分でなく、ポイントをついた討論にならないうちにベルが鳴つてしまい、双方が不満足感を持つたまま終わることがしばしばある。ポスターセッションでは、相手のいうことを確認しながら討論でき、時間も十分あるので、そういうことはなかつた。参加前に心配していたほどのこともなく、通常の講演発表のときよりも遙かに気軽にしかも楽しく過ごせ、充実感があつた。こんなぜいたくな発表の機会を与えられて、たいへん満足している。未経験の方には一度参加されるようお勧めしたい。とくに、演壇から話すのが苦手な方や初めて研究発表される方には是非お勧めしたい。

\* 東京都立大学工学部教授 工博

\*\* 日本冶金工業(株) 工博